



# 学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和5年 1月31日 2月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

## 外国語を学ぶ意味とは何か？

校長 黒木 健

厳しい寒さが続いておりますが、本校保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。さて、今月の学校だよりは、「外国語を学ぶ意味とは何か？」と題して話をさせていただきます。

以前に、ある小学校から教員向け学習会の講師依頼を受け、その学校の先生方と懇談していた時のことです。ある先生から、「児童から『なぜ英語を勉強するの？』と尋ねられ、それに上手く答えることができませんでした。このような児童の疑問に対する適切な回答はあるのでしょうか？」という質問を受けました。勿論それには、多様な考え方が許容されるべきであると思いますが、私からは二つの回答例をお示ししました。一つは、「日本語だけで得られる情報には限界があること。」もう一つは、「英語に限らず外国語を学ぶことで母語の言語運用能力が鍛えられること。」です。

一例を挙げるとすれば、ある研究者が論文を書いているとして、先行研究などを調べるために、日本語に翻訳されたものも含め、日本語の文献だけに当たっていても、分野によってはごく一部の情報しか得られないなどということは、十分に起こり得ることでしょう。または、外国語の構文や文法を学ぶことで、そのプラスの効果として日本語に対してもより敏感になれたり、また日本語で文章を書く際などに良い意味でのこだわりが生まれやすくなる可能性が期待できるということです。私は外国語を学ぶということとはつまるところ、母語による言語運用能力を高めることと限りなくイコールだと捉えています。

私自身もこれまで、様々な外国語に挑戦してきました。英語は勿論ですが、学生時代は第二外国語はドイツ語、第三外国語ではスペイン語を学びました。これは失敗談ですが、三年次と四年次にそれぞれタイ語とペルシャ語（イランの公用語）の授業も欲張って履修しましたが、どうやっても両言語の文字を覚えることができず、入口の段階で挫折してしまいました。その後、三十代前半で中国語と出会い、英語以外の外国語として、今でも中国語だけは学び続けています。この自身の経験から言えることは、少なからずドイツ語を学んだことで英語の言語構造を深く理解できることに繋がったこと（英語は古いドイツ語にルーツをもつ言語であるため）、英語や中国語を学んだことで、日本語を書く際にも、日本語の言語構造を自然に且つより深く意識できるようになったのではないかと感じました。

令和二年度から、小学校ではこれまで教科ではなかった五・六年生の「外国語活動」が「外国語」として教科化（格上げ）され、教科書が出来ると共に、それに学習評価も加わることとなり、それからまもなく三年が経過しようとしています。小学校での英語教育導入に関しては、有識者間での論争はあまたありますが、経済界からの要望が強かったことがその大きな導入要因の一つです。これは、いわゆる「使える英語」へのシフトチェンジと言ってもいいでしょう。外国語を学ぶ以上、その言語を聞いたり話したりできるようになることは究極の目標の一つではありますが、「なぜ英語を勉強するのか？」との児童の疑問から、外国語を学ぶことによって、母語による言語運用能力が鍛えられるという側面も、一方で忘れてはならない点なのではないかと改めて感じたところです。